

武士の館奮闘記

—武家屋敷通り「侍の杜」の景色—

景観まちづくり委員会では、1月31日に佐倉市にて「まち歩き+セミナー」を開催いたしました。その企画のきっかけの一つとなったのが、武家屋敷通りに佇む「侍の杜」の存在です。本稿では、その活用に向けた取り組みをご紹介します。

きっかけは、所有者様からの一本のご相談でした。「武家屋敷通りに空き家を所有しているが老朽化している。既存を生かした活用を考えたいので相談に乗ってほしい。」

現地を確認すると、その建物は築100年以上を経た伝統構法の住宅で、近年まで住居として使用されていたものの、現在は空き家となっていました。建物は歴史的な風格を残している一方で、経年による傷みも進行していました。

所有者様のご希望は、単なる個人住宅としての再利用ではなく、地域貢献に資する形で活用したいというものでした。そう考える背景には、この建物を取り巻く周辺環境がありました。

佐倉市は、城下町としての歴史文化を観光資源として積極的に発信しています。侍の杜が位置する武家屋敷通りには、文化財指定を受

けた建物も複数存在し、観光名所として知られる「ひよどり坂」もすぐ近くにあります。

ただ、観光客が多く訪れるにもかかわらず、周辺には休憩できるカフェや滞在型の施設がほとんどありません。歴史的景観はあるものの、体験としてはやや物足りなさを感じるエリアでもありました。

この空き家を活用できれば、地域の回遊性や滞在価値の向上につながるのではないかと考え、具体的な検討を始めました。

しかし、すぐに法規上の課題に直面します。当該地は第一種低層住居専用地域に指定されており、居住実態のない飲食店等への用途変更は原則として認められません。歴史的な建物であっても、法規制の枠組みの中では住居用途以外への転用は容易ではないのです。

これは本件に限らず、全国各地で見られる課題であり、歴史的ストック活用の難しさを象徴しているように感じました。

そうした中、景観まちづくり委員会では、佐倉市とのまち歩き企画を進めながら、この建物の可能性も探ることにしました。

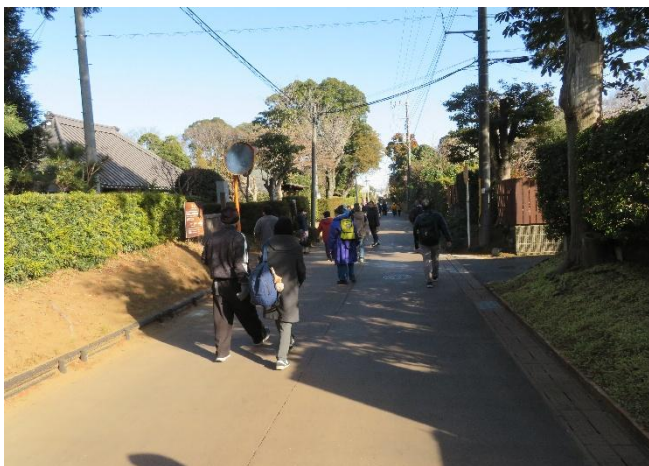
現在、侍の杜は市の公園緑地課が管理しており、特に庭園の美しさが際立っています。

庭園は建物から眺めることを前提に設計されているため、室内からの視線と一体となってその価値が最大化される空間構成と考えられます。

そこで、まち歩きのプログラムの中に侍の杜での休憩時間を組み込むこととしました。

参加者や行政の方々に、建物と庭園が織りなす空間の魅力を実際に体験していただくことができたのです。

しかし当時、侍の杜は一室のみが辛うじて使用可能な状態で、庭園も十分に眺められる状況ではありませんでした。



写真：武家屋敷通り まち歩き当日の様子

このままではその魅力が十分に伝わらないと考え、私たちは庭園に面した続き間の和室を活用できるよう最小限の整備を行うことを提案しました。

まち歩きの一週間前、事前準備として使わせていただく場所のお掃除をし、傷んだ畳の上には御座を敷きました。庭園に面する障子は破れたままになっていた為、障子紙を張り替えることにしました。

委員会のメンバーで慣れない DIY をするというのは大変でもありましたが、とても楽しく行うことができました。

整備後は、障子越しにやわらかな光が入り、庭の緑と風が室内に通ると、空間は見違えるように息を吹き返しました。建物が本来持っていた力が、ほんの少し手を入れることで舞い戻ってきたようでした。

当日は、その和室で簡単なお茶と佐倉銘菓「蔵六餅」を囲みながら休憩をとりました。

参加者は佐倉の歴史文化について語り合い、庭を眺めながらゆったりとした時間を過ごしました。

まち歩きの中でも、最も多くの笑顔が見られたひとときだったように思います。

行政担当者からも「とてもよい雰囲気であり、いい景色ですね。良い使われ方です」との評価をいただきました。参加者からのアンケート結果も好評でした。用途変更という制度的な壁はあるものの、「使い方」の工夫によって建物の可能性は広がることを実感した瞬間でもありました。

景観とは、単に建物や庭園の保存状態を指すものではないと感じています。

伝統的な建物と手入れされた庭園、そしてその空間の中で人々が語り、時間を共有する風景——そうした“営みを含めた風景”こそが、魅力ある景観の本質ではないでしょうか。景観まちづくり委員会では、これからも地域に根ざした建物や空間の価値を掘り起こし、体験を通じて伝えていく活動を続けてまいります。

(文:三代川 剛久委員)



写真：侍の社 事前準備の様子



写真：侍の社で休憩中の様子